

小隊四分の一を邸内にて養い、子〔小野清は慶応2年〔1866〕林大学頭へ入門〕が同郷星恂太郎（後の仙台藩額兵隊長）、菅原隼太（額兵分隊長）、竹内集（同上）邸内の馬場に於て日々これを練る。固より尋常一様の儒者にあらず。』と記してある。

注(6) 当時の人々は軍服の色により、英国兵を赤隊、仏蘭西兵を青隊と呼んでいた。

注(7) 八旗と緑營の兵。

注(8) 清の太祖の定めた兵制。清朝創業の際に功勞のあった者の子孫を以て組織した兵。その満洲人から成るものを満軍八旗、蒙古人から成るものを蒙古八旗、漢人から成るものを漢軍八旗と称し、合計24旗30万と号した。八旗とはその軍旗の色から区別したもので、鑲黄〔じょうおう。黄地紅辺〕・正黄〔純黄〕・正白〔純白〕を上三旗、鑲白〔白地紅辺〕・正紅〔純紅〕・鑲紅〔紅地白辺〕・正藍〔純藍〕・鑲藍〔藍地紅辺〕を下五旗という。

注(9) 清代、各省で招募した漢人を以て組織した軍隊。その旗幟が緑色であったのでこの名が生れた。

注(10) 字は士張、羽峯と号す。会津松平家の家臣、幼時藩校に学び、やがて江戸昌平校に進学し、傍ら洋書を杉田成卿に学んだ。維新後、太政官・文部省に勤務、漢学を以て高等師範学校教授となった。明治42年歿、87才。

注(11) また箱立とも表記したが、明治2年旧幕軍制圧後新政府は函館と改称した。

資料 大漢和辞典第12巻（諸橋轍次）

仙台額兵隊記（片平六左）

## 116 「すず」とは何か

問 「佐々木喜善の昔話」に『……一個の御酒錫（おみきすず）と小なさ箒をもらった。権現様の言(1)うことには、この御酒錫はいくら酒をついでもつぎきらぬ錫……』とあります。「すず」とはどんなものですか。(2)

答 「すず」とは、酒を入れる徳利のような容器で、昔は陶製のものがなく、すべて錫製だったので(3)このように呼ばれます。もとは、れっきとした中央語でしたが、徳利とか、銚子とか、チロリの語(4)に押されてか、次第に方言として残存するだけになってしまいました。(5)

「すず」についての図書資料には、次の諸書があります。

1. 「全国方言辞典」（東条 操編）

『すず

- ① 徳利。盛岡（御国通辞）・仙台（浜荻）・庄内（浜荻）・上州（登古呂言葉）・秋田・山形  
岩手・宮城・福島・茨城県多賀郡・岐阜県郡上郡・富山・石川・和歌山・奈良県吉野郡・徳島・  
高知・島根・大分。
- ② おみきすず。  
おみき徳利。神奈川県高座郡。』
2. 「大言海」（大槻文彦）  
『すず（名）酒壺。徳利ニ似テ、口ノ細キモノニテ、酒ヲ盛ル器、錫ニテ作ル。転ジテ陶製ナル  
ニモ云フ。仙台ニテハ今モ云フ。饅頭屋本節用集「錫（スズ）、瓶」曾呂利狂歌咄（寛文）三  
「或僧、道明寺ノ干飯ト、錫ニ酒ヲ入レタルヲ得テ」』  
(6) (7)
3. 「岩波古語辞典」  
『すず〔錫〕錫製の酒入れ。「月蔵坊当年の礼に來たり、錫一對これを送らる」（言繼卿記永禄  
2.1.26）』
4. 「仙台の方言」（土井八枝）  
『すず 名 徳利  
「さかすず」（酒徳利）。「からすず」（空の徳利）』
5. 「仙台方言考」（真山青果、「真山青果全集」第15巻、新版全集第17巻の内）  
『すゞ  
陶器の徳利または西洋酒の壺の如き容器を仙台地方にて「すゞ」と云ふ、錫の徳利の略なるべし。  
女用訓蒙図繪（おんなようきんもうすずえ）には「すゞ」として神酒徳利の繪を出せり。近松の仏  
の原「文蔵幸ひと三方かぶりながら、すゞを口へ寄せづつと飲みよい気味いふところへ云々。」  
(9) (10)  
玉露叢〔ぎょくろうそう〕「御酒など参り候時は、御土器に錫を添置かれ、冷酒にて各自酌なされお  
参り候云々。」杜郭方言考「すゞ。徳利をすずといふは貞丈雜記酒盃部に「今徳利といふものは、  
いにしへはすゞといひけるなり。昔は焼もの、徳利なし、皆錫にて作りたる故すゞといふなり。』」  
(11) (12)
6. 「方言」（藤原勉、「宮城県史」20の内）  
「仙台方言」（藤原勉、「仙台市史」第6巻の内）  
『すず 徳利や徳利型の陶器を言う。もと錫で作られた名残り。（中略）浜荻「すず錫。おみき  
すず共。もと錫にてつくりし故かくいふか。とくりはやきもの也、やゝたがへり。とくり。』
7. 「岩手方言集」旧伊達の部（小松代融一）  
『スズ 徳利、瓶、陶製の瓶』
8. 「大辞典」（平凡社編）  
『スズ 酒壺 徳利に似て、口の細いもので、酒を入れる器。昔は皆錫で作った。転じて陶製の  
ものにもいふ。東北地方では今もいふ。〔後略〕』
9. 「広辞苑」（新村 出編）

## 『すず 錫』

錫で製した、徳利に似た口の細い酒器。』

- 注(1) ささききよし。明治19年岩手県遠野に生まれた。明治・大正期の作家・民俗研究家。筆名繁、号鏡石。創作を志し、「芸苑」「アルス」等に短篇小説・詩を発表。大正9年彼が柳田国男に語った郷里の伝承が柳田により民俗学者柳田国男の名を高からしめたデビュー作「遠野物語」として公刊された。のち病気のため早大を退学して帰郷。郷里(土淵村)で村農会長・郡農会議員・村長などを勤めた。村長を辞任してからは一層民俗研究にうちこみ、特に昔話の採集に大きな業績をあげ、柳田国男等の昔話研究の道を開いた。昭和3年2月仙台市に移り住み、不如意の境遇に終始したまま、世を去った。昭和8年9月29日、行年48歳。著に、「奥州のザシキワラシの話」、「聴耳草紙」、「江刺郡昔話」、「紫波郡昔話」、「東奥異聞」、「老媪夜譚」、「農民俚譚」等がある。
- 注(2) 仏が衆生済度のため化身して我国に現われた神。本地垂迹〔ほんじすいじゃく〕の説から出たもので、熊野三所権現・山王権現の類。権化〔ごんげ〕ともいう。
- 注(3) 朝鮮語から出た語とも、また酒を注ぐ時の音から出た語ともいわれる。陶製・金属製もしくはガラス製の細く、高く、口のすぼんだ容器。酒・醤油・酢などを入れる。
- 注(4) 酒を容れ、盃に注ぐに用いる器。木製または金属製で、長い柄がついており、注ぎ口の両方にあるのを諸口〔もろくち〕または両口、一方にだけあるのを片口といった。今は徳利に同じ。
- 注(5) 酒の燗をする器。銅または真鍮・錫製で筒形、注ぎ口がある。
- 注(6) 室町末期の、奈良の菓子商(塩瀬の祖)饅頭屋宗二(林逸)の刊行した節用集。〔節用集、昔は「せっちょうしゅう」と発音した。簡便で実用向の辞書。室町時代から江戸時代にかけて、非常に多く使われた〕。宗二は奈良の人、姓は塩瀬、本名林逸。帰化入林浄因の子。学力あり、節用集のほか尚書・左伝・論語・史記・黄詩・蘇詩・桂詩・柳文や源氏物語林逸抄、古今集奈良伝授などを編著刊行した。総称して饅頭屋本という。天文9年歿、84才。2代宗二もよく父の遺業を継いで、神道を学び、和歌をも詠み、節用集を修補した。
- 注(7) 5巻。浅井了意作。寛文12年〔1672〕刊。古今の狂歌及び狂歌咄を収めてある。
- 注(8) 糯米を蒸してから後に乾燥したもの。熱湯を注ぎ、柔らかくして食用に供する。道明寺で天満宮饅飯の下がりやを乾燥貯蔵したのに起るといい、軍用または旅行用として重用された。道明寺とは、大阪府南河内郡道明寺町にある真言宗の尼寺。敏達天皇の朝、聖徳太子の開基で、初め土師寺〔はじてら〕と称した。
- 注(9) 別名「当流女用鑑」、5巻5冊の往来物、奥田松柏軒編、吉田半兵衛画、貞享4〔1687〕刊。往来物とは、鎌倉・室町時代から明治初期に至るまで、初等教育、特に寺子屋用に編纂された教科書の総称。「往来」は消息往来の意で、平安末期の「明衡〔めいごう〕往来」

「東山往来」などを先駆とし、書簡文の模範文例であったが、中世以降は教科書的なものとなり「尺素〔せきそ〕往来」「庭訓〔ていきん〕往来」など庶民教育に重要な意義をもつものが現われた。

- 注10) 「傾城仏の原」の通称。近松門左衛門作、上方元禄歌舞伎の代表作の一。元禄12年〔1699〕正月京都万太夫座初演。
- 注11) 林鷺峰著。慶長3年秀吉病気の事から寛文11年に至る歴史的事実、典故等を記した書。林鷺峰は林羅山の3男、両兄早世のため家督を継ぐ。本名恕、一名春勝、字は春斎。号は鷺峰のほか向陽軒、葵軒・桜峰など20に近い。夙に家学を受け、強記博学、經史子集殆ど精通しないものはなかった。父に従って江戸に出て家光に謁し、以来、その下問に応じ、編書に従事、また諸生を教授して名声あり、来り学ぶ者多く、当時の儒宗と称せられた。延宝8年〔1680〕歿、63才。著に「本朝通鑑」をはじめ、詩1万首余、文は2千編を越えた。
- 注12) 有職故実の随筆。伊勢貞丈が宝暦13年〔1763〕正月11日書き始め、天保14年〔1843〕6月、貞丈の孫貞友と千賀春樹等が浄書校正し、16巻32冊として出版した。伊勢貞丈は安斎と号し、有職故実家として有名だった幕臣。天明4年〔1784〕歿、70才。その著書数十種数百巻に上る。
- 資料 全国方言辞典（東条 操編）  
大言海（大槻文彦）  
仙台の方言（土井八枝）  
仙台方言考（真山青果、「真山青果全集第15巻、新版全集第17巻の内）  
方言（藤原 勉、「宮城県史」20の内）  
岩手方言集（小松代融一）  
大辞典（平凡社編）

## 117 日本橋の下の水

問 「鐘と狼火と」(木村 毅) に『日本橋下をながれている水が、はるかにロンドンまで通じている……』、また、竜雲院の案内板に『…日本橋の下の水はロンドンのテムズ河に通ず……』とありますが、林子平の何の著書にあることばでしょうか。

答 お尋ねの語句は、林子平著「海国兵談」第1巻に、「竊に憶へば当時長崎に嚴重に石火矢の備有て、却て安房、相模の海港に其備なし、此事甚不審<sup>(1)</sup>（いぶかし）。細かに思へば江戸の日本橋より<sup>(2)</sup>